



# つばめ農園おひさま便り

48

安溪貴子・安溪遊地

## 雑木林から微生物学と生態学へ

二〇二三年一月一日。明け方に雷鳴が何度も轟きました。夜が明けた阿東徳佐盆地は、一面の銀世界。例年より二週間ぐらい早い初雪です。まだ、サツマイモも熱帯系の山芋のダイジョも掘り上げていません！こんな雪をここらでは「ビョータレタマガシ（怠け者驚かし）」というのだそうです。

「冬来たりなば春遠からじ」とシェリーはうたいました。中学生の時、貴子は、冬枯れの雑木林で、木の芽がもう春の準備をしていることに気づきました。それが後の博士論文につながりました。納豆菌の間は、一二〇度の高温にも耐えて休眠します。従来は、休眠中の胞子は呼吸しないとされていましたが、実は目覚めに備えて微量の呼吸酵素を維持していることを証明したのです。

ミクロの生物学の生き馬の目を抜くような競争に挫折して、川喜田二郎先生の移動大学に参加しました。そこで出会った遊地と結婚して京都で暮らすようになり、人類学の伊谷純一郎先生指導の修士論文のための西表島廃村研究を手伝ううちに、生態学をめざすことになりました。

植物生態学の田端英雄先生の勧めで、#日

本産ハコベ属一八種をテーマにしました。「ハコベの目になれるかな？ ハコベの気持ちかわかるかな？」というのが、投げかけられた問いかけでした。京都北山の入り口の大原の里を歩いていると、三か月ほどで、ちがう種類のハコベが次々に何種類も暮らしていることが見えてきました。そして、歩いているだけで「あ、ここはサワハコベさんがいそうだな」と、里から山への環境の変化とそこに暮らす生き物の関係が直感的にわかるようになりました。

現場で五感をフルに働かせて実物に触れ、身近にある生ききとした世界にひたる。これは、いのちとの出会いなおしです。この「わくわく」を伝えたい、というのが、貴子の大学での生物学の講義の基本です。受講生ひとりずつに、何種類ものどんぐりとその帽子（最近ハコベともいいます）と葉を配り、手に取って比べてもらいます。そのために、あつちの林、こっちの植え込みと回って準備をします。

## 理科と文科に橋をかける

結婚してからは、人と自然のかかわりの人類学を専攻する遊地といっしょに西表島やア



フリカの森で過ごし、のちには、フランスやスペインも足を伸ばして、ちがう環境と文化の中で過ごす機会が増えました。

外国語で話すことは難しくても、身近な道具や花などをスケッチすることで、地元の方々とも仲良くなれました。アフリカの村で料理や酒造りを教えていただきながら、微生物学と生態学と人類学の複眼で見えていくことが、前号でも紹介したようにそれまで学界に知られていなかった「アフリカのカビ発酵酒」などの新しい発見につながりました。

二〇年ほど前から貴子は、山口県内の看護学校で、文化人類学も教えています。ときど

ウエンディとピーターパンは大学生たちと空を飛ぶ練習中。台湾宜蘭県立蘭陽博物館で、洪淑芬博士撮影。

き、アフリカのカラフルな布を持ちこんで学生自身が体に巻きつけて装ってみるといった異文化体験を加えると、眠そうだった学生たちの目も輝いてきます。

「人の見のこしたものを見るようにせよ。その中にいつも大事なものがあるはずだ。あせることはない。自分のえらんだ道をしつかり歩いていくことだ。」これは、一五歳で周防大島をでる宮本常一先生に与えられた「#父の十箇条」の最後の言葉です。ひとつのテーマを何十年も追い求めて、忘れられたところに大きな本が出る。そんな研究が評価されるフランスでの学びのスタイルにも大きな励ましを受けました。

どんどん専門化していく学問。しかし、そうした狭い科学では解けない問題が多くあります。人類の生活スタイルそのものが生み出した地球環境問題などはその典型でしょう。わたしたちは、忘れられた境界領域を二人で掘りながら、理科と文科の谷間に橋をかけようとしてきたのでした。

日本の田舎に暮らし、自分たちは、とつくに世界の研究者から忘れられた存在だと思ってきました。ところが、この夏にULB（ブリュッセル自由大学）からメールが来て、来年一月にコンゴ民主共和国の#キサンガニ大

学と共催の国際学会で、二人で基調講演をという招待が来たのです。秋には、琵琶湖博物館での世界古代湖会議で出会ったイリノイ大学シカゴ校の考古学者から、アンゴラが中央アフリカでの新しいプロジェクトに二人で加わらないかという誘いがきました。

キサンガニの方は、アフリカ史最大のイベントである、バンツ語を話す人々が赤道以南に拡散した歴史のコンゴ川ルートを追いつめている研究グループとして、直接話を聞きたいというのです。実現すれば、遊地は、三四年ぶり、貴子には実に四四年ぶりの「里帰り」となります。ちょうどムクウエ医師も出馬する大統領選挙とかぶる日程で、これまでも、内戦やエボラ出血熱の流行にはばまれて、何度も中止しているコンゴ民主共和国への旅がどうなるかは予断を許しません。

(つづく)

✉ a@ankei.jp

📄 <http://ankei.jp>



QRコードにスマホをかざすと、サイトが見られます。文中の#はネット検索してください。